

テルマエ通信 二〇一三年 第一号

【石山ゼミ】文責…古川

石山ゼミは旧諏訪ゼミを引き継ぐ形で今年から動き出したゼミです。日本の雇用システムが、環境変化、企業戦略の変化などにより、パラダイムシフトを起こしており、今後の方向性がまだはっきりしない不確実な状況の中で、将来のより良い雇用システムのあり方を探ることを目的に研究に取り組んでいるゼミです。（具体的には、人的資源管理、組織内専門人材、越境学習、実践共同体、キャリア権などに取り組んでいます）

石山ゼミとしては初年度ですが、旧諏訪ゼミを引き継いでいることと、我々大学院生の心をつかりとつかむ魅力的な先生であることから、企業セクター、大学セクター、公務セクター等、各方面で活躍する志ある専門人材（修士課程6名、博士課程6名、研究生5名）が集い、日々研鑽しております。ゼミでは、ゼミ生各人の目指すゴールの形として論文の完成を到達目標としています。論文を完成させる途中のプロセスには「雇用の専門的な知識習得」「ゼミ内での視点に留まらない越境学習」そして「各人が形に残したいという大学院にきた想いを

多様なゼミ生との対話を通じて仕上げていく」重要な取り組みが盛り込まれています。そのために必要な論文を書くスキルの修得と、ゼミでの発表や石山先生の個人指導を通じて、各人の頭の整理を進めるゼミの流れとなっております。

教室での学習以外にも夏合宿やキャリアインテグレーション研究会、クリスマスパーティーなどを企画していきます。

最後に、石山ゼミには Facebook

<https://www.facebook.com/IshiyamaNobutakaLa>

b.Hosei

がございますので、皆様に「いいね！」を押していただければ幸いです！



(写真：ゼミ歓迎会で楽しくバーベキューをやりました！)

【岡本ゼミ】文責…増成

岡本研究室では地域経済学を中心とした研究を行っています。

岡本ゼミでは毎週行われるゼミナールは博士と修士合同に行い、毎週のテーマに対して熱い議論を交わしていきます。また、岡本ゼミの特徴として“輪読”を行っています。この輪読は他のゼミの輪読とは違い、文献の内容について理解していくだけではなく、その背景にある要因などについて様々な視点から幅広く考えディスカッションを行っています。ふと、先生がおっしゃる“それはなぜ？”という問いかけにゼミ生は額に汗しながら考え、また国内だけでなく海外の事例なども数多く紹介してくださいるのでより密度の濃い輪読になっています。岡本研究室では、常に「それはなぜか？」という疑問を持つ姿勢を大事にし、一つひとつの事象の本質を見ていく力を訓練しているのです。それらは、研究者に必要な概念などの理解や整理、新しい理論的フレームワークについて議論する力を養っています。また、実践的な研究活動も多数行っております。岡本研究室では、ゼミ生が志や関心をゼミに持ちより、

そこからプロジェクトという形で同志を集めて視察や遠方活動を行っていきます。つまり、各々の特定の関心事や問題意識をプロジェクトという形で実践活動を行えることが岡本ゼミの面白いところ。一部ではありませんが、現在までに以下の研究活動を行ってまいりました。

- ・地域活性化学会（高知県、群馬県など）
- ・構原町、四万十町視察（高知県）
- ・みなかみ町活性化プロジェクト（群馬県）
- ・遠隔授業プロジェクト（埼玉県、北海道など）
- ・久慈市プロジェクト（岩手県）
- ・七尾市プロジェクト（石川県）
- ・早川町プロジェクト（山梨県）
- ・飛騨高山プロジェクト（岐阜県）
- ・六次産業化プロジェクト（宮城県など）

このように、岡本研究室では皆さんの問題意識や関心事をプロジェクトとして具現化でき、かつ様々なプロジェクトに参加して様々な地域を見て回れることで、沢山の学びや知見を得ることができ。今年もプロジェクト活動に伴う様々な遠方活動や視察が予定されているので、機会があればまたご報告させていただきたいと思っております。

【恩田ゼミ】文責：荘司

「都市空間プログラム」に所属している恩田研究室では、M2が3名、研究生が数名所属し、建物や空間を活かした「都市再生」について研究をしています。

恩田重直先生は中国や日本を中心とした都市再生の研究に尽力され、「中国における産業遺産を活用した都市再生について」「日本橋川周辺の景観の変遷過程について」「民国期廈門の都市改造―1930年初頭、中国福建省の廈門における都市改造」といった論文を執筆しています。今年度は本大学院の客員准教授として指導にあたられていますので、授業はゼミ生を対象とした「プログラム演習」のみとなっています。

近年のゼミ活動では、地方の「中心市街地」の状況についての研究に努めています。特に「静岡県浜松駅前」や「長野県の上諏訪」を中心としたフィールドワークに重点を置き、歴史的建造物・史跡の活用、空き店舗・空き家の活用、市民のライフスタイル・ワーキングスタイルの変化、震災復興以後の都市空間の変化、顧客を呼び込む個店の魅力、中心市

街地店舗変遷に関する図面データベース構築といった様々なキーワードを基に展開しています。

また、先生が工学部建築学科出身であるために、ゼミでは建築図面や地図データ（GISデータ）を活用し、CADソフトによって表現することにも取り組んでいます。先日「共同建築とその時代の建築たち―浜松まちなかの移り変わりの中で」というテーマで現地発表を行いました。その際に写真に掲載されているようなCAD図面を含んだオリジナルの資料を作成しています。研究の一環として、論文以外にCADやデザインソフトを使用した「成果物」を作成する能力を養えることも本ゼミの魅力の一つかもしれません。

ゼミ生や研究生個人の研究としては「街路の活かし方」、「中心市街地の状況」、「写真による都市に住む人々の考察」といった多岐に渡るテーマを基に展開しています。一見すると纏まりがないように見えますが、「都市再生について考えたい」という軸は先生・ゼミ生・研究生の皆が持っています！ゼミの雰囲気や一言で表すと「アットホーム」という感じでしょうか。マイペースの人が多いため、良い意味でのほほんとした感じですよ！興味があれば気楽に遊びに来てください！

【上山ゼミ】

上山肇先生が率いる「上山ゼミ」の紹介をさせていただきます。

まずは先生のご経歴から。上山先生は昭和六十年に大学をご卒業後、民間企業を経て東京都特別区の公務員としてこの三月まで、都市マスタープランや住宅マスタープランの策定、地区計画策定や景観まちづくり、更には再開発事業や密集事業など多様なまちづくり政策の形成と実践に関わってこられました。社会人になって以降、働きながら大学や学会（主に日本建築学会）で研究活動をし続け、後進の育成にたずさわりたいとの思いから転身し、四月より政策創造研究科で我々をご指導いただいています。

次にこれまでの研究実績をご紹介します。環境都市計画の観点から東京都江戸川区が全国初の事例となった親水公園をテーマに周辺の都市環境に与える影響について研究し博士号（工学）を取得。また地区まちづくりに関する研究では、元々は工学の分野がご専門ですが、平成14年には制度・条例の観点で法学の立場から、平成19年には経済的評価の観点で経済学の立場から論文をまとめておられ

ます。そして数々の研究を総括する意味で、「地区まちづくり政策の理論と実践」というテーマで良好な市街地環境形成の実効性を確保する「地区まちづくり」について工学・法学・経済学といった学問を融合したかたちで体系的に整理し、平成23年に博士号（政策学）を授与されています。

そんな輝かしい実績を積み重ねてこられた上山先生からゼミ指導を受けるのは、M2・関さん、M1・牧田さん、M1・河村さん、M1・広瀬の4名。関さんは「エコミュージアム」を、牧田さんは「住民参加によるまちづくりの合意形成」を、河村さんは「漁業を産業の中心とする港まちの再生」を、広瀬は「観光まちづくり」をそれぞれテーマにしています。先生は他のゼミと積極的に共同研究される意向をお持ちのため、様々なかたちでご一緒することになるかと思いますが、「上山ゼミ」を何卒宜しくお願いたします。

【北原ゼミ】文責：山本

北原研究室では、企業の社会的責任（CSR）について研究をしています。現在は2名のゼミ生（修士課程）、研究生1名が所属しております。北原正敏先生は、2013年3月に退任されましたが、今

年度は客員教授としてプログラム演習のみを担当されています。私にとって入学した当時ゼミで新入社員になった気持ちでとスタートしたことから後輩となる新入生がいけないことは残念ですが、北原教授最後のゼミ生として在籍できていることに誇りを感じております。

2013年度のゼミは、2名のため各自の研究テーマに沿った形で、修士論文経過報告とCSRの最新情報、文献などを発表し、北原正敏教授の指導のもと討議しながら進めています。また、研究室のOBOGもときどきゼミに顔を出してくれます。

本年度が最後となるため、北原正敏研究室に携わっていたいただいた全ての方に感謝をし、今後も北原ゼミを盛り上げていきたいと思っております。

【小峰ゼミ】文責：別所

私たち、小峰・池永ゼミでは、実際の政策立案現場におけるご経験が豊富な先生方のご指導のもと、院生各々が非常に多岐に亘る興味・関心に沿って、調査・研究を進めています。

メンバーは学部卒の20代から、様々なご経験をお持ちの60代まで、年齢層も大変幅広いものとなっています。それぞれの研究テーマは、日本の政治経

済、雇用・労働・福祉政策、地域経済問題、各国経済事情、ビジネスイシュー、交通経済・政策、などといったように多様で、自らの関心に合わせて自由に勉強できる環境があります。人数は21名(2013年現在・先生方除く)と比較的多く、ドクターコースの方々も複数おり、新入生にとってはいささか敷居が高いながらも、チャレンジングで刺激的なゼミであるように思います。

普段は、週1回の演習の時間に集合し、交代でメンバーが自身の論文構想や関心のある問題について発表し、全員で議論を行います。テーマが多様であるため、自分の関心分野以外からの発表が次々行われるため、時によってはフォローするのが大変ですが、非常に勉強になります。

また、夏季休暇の間には、合宿を開催します。1泊程度で調査・見学をし、現地で議論を行います。一昨年、昨年は東日本大震災の被災地を訪問し、今年度は新潟・長岡地区の産業や防災について見学を行う予定です。

【坂本ゼミ】文責…坂本

私ども坂本ゼミでは、坂本光司先生のもと、地域で頑張る中小企業の調査研究に取り組んでいます。

坂本先生は、企業は「人を幸せにする経営」を実践すべきである、と提唱されています。ここで言う「人」とは、従業員、外注先・仕入先、顧客、地域社会、そして株主の5者と指し、人を幸せにしていれば結果的に業績も上がる、という考え方に基づいています。

また先生の研究における基本的なスタンスは「現場主義」と「弱者への視点」であり、代表的著書である「日本でいちばん大切にしたい会社」やそこから生まれた表彰制度である「日本でいちばん大切にしたい会社大賞」などを通して、社会に対する情報発信や頑張る企業を応援する姿勢はゼミでも一貫しています。

ゼミ生は40名以上とかなり多く、半数以上は実際の企業経営者もしくはこれから経営者になることが予定されている後継者であり、毎回かなり活発な議論がなされる一方、毎月ゼミ生の誕生会を開催するなど、大家族的な雰囲気でも運営されているのも特徴です。

また月に1回の出張ゼミや夏季合宿等の際には、実際に企業を訪問し、社長から直接お話を伺っています。先生の企業調査への同行や、学生が企画する企業訪問まで含めると、企業訪問のチャンスは数え切

れないほどで、まさに「現場主義」の実践と言えるでしょう。

本年度、ゼミ全体で取り組んでいるプロジェクトは「200の指標から見たいい会社診断」の作成と、「障がい者雇用でがんばる50社」出版プロジェクトです。

この他にも希望者を募る形で、一般事業会社との共同研究や共同出版事業にも数多く取り組んでいます。本年度は島根県から「中小企業版ミシユラン」の作成事業を受託し、すでに企業選定等の作業がスタートしています。

なお今年2月には、それら事業の受け皿として「一般社団法人坂本ゼミ経営研究会」を設立するなど体制の整備も進み、その活動の範囲をますます広げていきます。

【須藤ゼミ】

政策創造研究科の垣迫です。須藤廣ゼミナールの紹介をさせていただきます。

須藤ゼミナールは須藤廣先生のもと、博士9年生が1名、博士3年生が1名、修士1年生が3名の計5人です。須藤先生が政策創造研究科に着任したのは今年からのため、第一期生ということになります。

須藤廣先生の専攻は、観光社会学、文化社会論、社会意識論です。現在は法政大学大学院と併せて北九州市立大学でも講師をされているため、東京と九州間をいったりきたりの多忙な日々をおくられております。そんな多忙な日々を感じさせないほど、とても気さくな先生です。

現在の主なゼミナール活動は、文化人類学や社会学系の文献の「輪読」をしています。具体的に説明すると、毎回、輪読の担当者を回していき、担当者は文献の概要・要点を纏めたレジュメを作成し、ゼミナール時に解説を行います。3時間のゼミナールの中で、その文献について各自が熟考し、毎度白熱した議論が行われます。

参考までに、これまで輪読した文献を紹介すると

○・ギアーツ、吉田慎吾、柳川啓一、中牧弘充、板橋作美訳（1987）『文化の解釈学Ⅰ』岩波書店
ジェイムズ・クリフォード、ジョージ・マーカス編、春日直樹、足羽与志子、橋本和也、多和田裕司、西川麦子、和邇悦子訳（1996）『文化を書く』紀伊國屋書店
岩淵功一（2001）『トランスナショナルジャパン』岩波書店

稲葉振一郎（2006）『モダンのクールダウン』NTT出版

須永和博（2012）『エコツーリズムの民族誌』春風社

などがあります。時にゆるく、時に熱い須藤ゼミナールをこれからもよろしく願います。

【中嶋ゼミ】文責…小林

「テルマエ通信」読者の皆様、こんにちは。今年度の中嶋ゼミのゼミ長を務めることとなりました、小林拓実と申します。今回は、我が中嶋ゼミの紹介をさせて頂きたいと思っております。

中嶋ゼミは昨年度に設立された、比較的新しいゼミです。中嶋聞多先生は2009年に信州大学から本研究科に着任されました。現在は地域活性化、地域と企業のブランド&イノベーション戦略を専門とされています。ゼミ生は計4人で、県の職員や小学校の先生、そして私のような学部上がりまで、様々な面々が揃っています。

我々ゼミ生はゼミに加入する際、中嶋先生から1つの条件を課せられています。それは「フィールドワークの場を持つ」ということです。そのため、各々が生まれ育った地域や、関心のある地域を選択して

調査、研究を行っています。現在、特に積極的な活動を行っているのは、埼玉県東秩父村をフィールドとしている松岡さんです。昨年度のゼミ長でもある松岡さんは、埼玉県の中山間地域に活力をもたらす「ふるさと支援隊」の事業に応募し、見事、活動資金として50万円の補助金を獲得された優秀な方です。

昨年度は我々ゼミ生や中嶋先生、さらに他のゼミの方々にも参加して頂いて、東秩父村でのワークショップを開催しました。村の方々がどれほど参加して下さるのか不安でしたが、予想以上に多くの方が参加してくださいました。我々が学ばせて頂いたのは言うまでもありませんが、村の方々も、慣れ親しんだ村の魅力を再確認されていたように見受けられ、とても有意義な会となりました。

今年度も、松岡さんが中心となって活動を進めていきますので、ご興味のある方は是非、松岡さんにご一報いただければと思います。

最後に1つだけ告知をさせていただきます。中嶋ゼミのFacebookページを作成しました。ゼミが手掛けるプロジェクトや、地域づくり、地域ブランディングに関する情報をお伝えしていきます。URLは

<https://www.facebook.com/chikizukuri/>

です。皆様に「いいね！」を押して頂ければ幸いです。

【樋口ゼミ】

〈教授紹介〉

樋口先生は今年の4月より信州大学(信州大学イノベーション研究・支援センター長)より法政大学大学院政策創造研究科に赴任されてきた教授である。主な研究テーマは地域産業政策論や経済学の視点からのCSR論を専攻分野として研究されている。また、長年にわたり地域のビジョン作りや若手企業家の育成、環境プロジェクトなどを手掛けられ、地域や企業に軸足を置いた現実味のあるアプローチが行われている。さらに、イタリアでの講演や海外での経験を通し、日本の今後のあるべき姿をゼミ生に対し、熱く教鞭をふるっている姿が印象的である。

〈ゼミ紹介〉

樋口研究室では、企業の社会的責任について研究している。現在は4人のゼミ生(博士課程一名、2012年入学者1名、2013年入学者2名)が所属しており、日本に限らず世界のCSRの動向について事例を交え、樋口先生の指導の下楽しく討論を進めている。人数も比較的少なく、先生の多彩な知の利点でもある。

ゼミ生にこんな質問を投げかけてみた。「なぜ樋口ゼミを選んだのか?」(回答)「地域産業や地域づくりをテーマに産業政策も経験された先生だからこそ学びたいと思った」「日本にたくさんいい企業はある。しかし、何をもっていない企業とするかをCSRとどうフィルターを通して、世の中をみてみたかった」「ソーシャルビジネスについて調べていたら、樋口先生が日本だけでなく、イギリスのソーシャルビジネスにも精通されており、勉強したいと思いました」

と先生の経験や人柄に惹かれて入ったゼミ生やCSRに惹かれて入ったゼミ生がいる。毎週ではないが、ゼミでの飲みニケーションを行ったり、外部の著名人をお呼びして飲みに行ったり、和気あいあいと学んでいるのが我が樋口ゼミの特徴である。

【増淵ゼミ】

増淵ゼミは40人も学生が、都市文化やコンテンツツーリズムを中心に様々な研究に取り組んでいます。そのため、ゼミ自体のアイデンティティーが弱く、ゼミが一丸となって活動を行うことも難しいのが玉に傷です。しかしそれ故に、今まで知らな

かった新たな世界を知る機会が多く、非常に面白いゼミだと思います。

普段のゼミでは、輪読や各自の研究の経過報告を行っています。やはり在籍学生数が多いため、毎回発表も大がかりな感じになります。中には袋叩きに遭ってしまう発表者の方もおり、先生が全力でフォローに入ることもあります。

大規模なゼミは苦しかったり、面倒くさかったりという大変なことも多いですが、様々な人の意見を聞けたり、自分が知らない分野に興味を持つことができるきっかけが多かったり、少人数のゼミにない良さがあると思います。そんな増淵ゼミで、各自が何度も挫折しかけながらも成長し、卒業時に「増淵ゼミで良かった」と思えたらそれで良いのではないかと考えています。

